

庾信体をめぐる文学と政治

——六七世紀中国における美文の流行をめぐって

佐川 英治

魏の太祖曹操の有名な言葉「文章は経国の大業なり」(『文選』卷五二「典論」)にあるように、中国では文学と政治は密接な関係をもつ。儒教において文学は徳行・言語・政事にならぶ孔門四科の一つであり「文学を積みて身行を正す」(『荀子』王制篇)とあって修身の重要な手段とされた。ここでいう「文学」は経学を指すが、主たる文人はすなわち官僚であるという古代の中国においては、政治が要求する価値の基準は、いわゆる詩賦の文学の世界をも強く規定していた。

ところが、政治の波に翻弄されるなかで、本人の予期せぬところで、結果的にこの基準から外れてしまった者もいる。本論がとりあげる庾信(五一三—五八二)は生前は高位高官にあつてその文学がもてはやされながら、死後一転して権力の側から「淫放」「軽險」と蔑まれ、「詞賦の罪人」の汚名を着せられた六世紀後半の詩人である。

その一方で、庾信の文体は七、八世紀に特に流行し、初唐の文学に大きな影響をあたえた。実はあまり知られていないが、庾信は六朝期の詩人のなかでも傑出して多くの作品を残す詩人であり、大量の作品が宋の『文苑英華』等に収録されて今日に伝わったことは、唐代にいかにも庾信の作品が広く読まれたかを示している。また杜甫が庾信を敬愛したことは有名であり、当時の最新の韻律論から生まれたその文体は、はじめ「宮体」「新体」とよばれ、のちに「庾信体」もしくは「徐庾体」とよばれ、美文の代名詞になっていく。

『庾信集』は海を越え、奈良時代の日本にも伝えられた。天平二十年(七四八)六月十日の正倉院文書「写章疏目錄」には「庾信集 廿卷」とあり、唐の太宗や許敬宗の文集などと並んであること、巻数が唐代の『庾信集』と一致することを考えれば、これが庾信集であることはまず間

違いない。

具体的に庾信集の影響を受けた文章としては奈良朝初期の威奈大村墓誌銘が挙げられる^①。この墓誌銘については、一九三二年に山田孝雄氏が「当時はもとより奈良平安朝を通じても匹儔を見ざるほどの名文」としてその典故を詳細に検討し、庾信の墓誌銘・神道碑と共通する典故を見出された^②。一九四七年には柿村重松氏が威奈大村墓誌銘に庾信の文章にもとづくものが多いことを指摘し^③、これを受けて一九六二年には小島憲之氏が威奈大村墓誌と庾信の墓誌銘とを全面的に比較し、誌文の書式や銘文に四字句を用いることが庾信の墓誌と同じ形式であること、銘文の典故においても庾信の墓誌銘と類似の表現を多いことを指摘した^④。

威奈大村墓誌銘の書式については、直接庾信にならったというよりは唐代の一般的な書式を踏襲したものと思われ^⑤、必ずしも庾信の墓誌銘をまねたということではできないが、銘文の表現には確かに共通性が多く、庾信の墓誌銘を参考にした可能性は高いといえる。もともと、日本の古代の墓誌できちんとした銘文をもつのは威奈大村墓誌だけなのであるが、銘贊の類に韻字を押すのは日本では文武朝(六九七—七〇七)以後の遺文に始めてその実例をみるようであり、特に歴史の浅い銘文の部分で庾信集が参考にされたのではないかと思われる。この他、『日本書紀』孝徳紀大化五年(六四九)条の挽歌二首が庾信の「代人傷往二首」にならったものであることも指摘されており^⑥、庾信の影響は単に漢文だけにとどまらなかった可能性がある。

以上のように、庾信は唐代の文学に大きな影響をもち、また日本の古代文学にも一定の影響をあたえたと考えられるが、あまり知られていないのが実情である。日本で庾信を広く紹介したのものとしては興膳宏氏の『庾信』

があるが⁹⁾、総じて八〇年代までは庾信に関する研究は日本でも中国でも寥々たるものであった。九〇年代以降、庾信に関する文学方面からの研究は飛躍的に増加したが¹⁰⁾、歴史研究者で庾信なり庾信文学なりを論じたものとしては、一九三一年の陳寅恪氏の研究や一九三四年の岡崎文夫氏の研究があるのみで非常に乏しい¹¹⁾。最近の加藤国安氏の大著では、庾信が後半生を過ごした西魏北周の政治史が相当深く掘り下げられているものの¹²⁾、庾信を生んだ歴史的背景はまだ十分な広がりをもってとらえられていないように思われる。そこで本論ではそのための予備的考察として、歴史書にみえる庾信もしくは庾信文学に関するエピソードや評価から庾信体流行の歴史的背景を考えることにしたい。

1 「宮体」の登場

宮体という文体が生まれたのは、六世紀の前半、南朝梁（五〇二―五五七）の宮廷社会においてである。宮体については『梁書』卷四簡文帝紀に次のようにある。

簡文帝は幼いときから明敏で、人にすぐれた理解力をもち、六歳で文章をつづり始めた。武帝は早熟なのに驚き信じなかった。そこで御前で試したところ辞彩が甚だ美しかった。武帝は驚いて「この子は我が家の曹植だ」といった。長じて寛大な性格を身につけ、喜怒を表情に表すことがなかった。（中略）幕府に文学の士を採用し、彼らとつきあつて飽くことがなく、つねに作品や書物を論じてはそれを文章にした。かつて武帝が作った『五経講疏』を玄圃で講述した際には、それを聞くため朝野の人がつめかけた。題詩を好み、その序に「余は七歳から詩癖があり、成長してもいっこうに倦まない」と書いた。ただし軽艶に過ぎ、当時それを「宮体」と呼んだ（然傷於輕艷、當時號曰宮體）。

簡文帝（蕭綱）は梁の武帝（蕭衍）の第三子で、兄の昭明太子（蕭統）とは同母兄弟である。「簡文帝」は「武帝」と同様死後の諡号であり、「晋安王」が当時の封号であった。梁の武帝は王朝交代のめまぐるしい南朝にあつて五十年になんなんとする安定の時代を築いた大皇帝であり、また皇太子であつた兄の昭明太子は『文選』の編者として有名である。当時、諸

王のもとにはそれぞれ文学サロンが形成されており、昭明太子の『文選』もその成果であるが、晋安王もまた積極的にその幕僚に文学の士を採用していた。晋安王はその性格からして詩を好み、文学サロンでは特定のテーマに特定のスタイルをもつた詩の応酬が盛んにおこなわれたが、それらの詩は概ね「軽艶」と称される響きをもっていた。当時はそれを「宮体」とよんだのである。

「宮体」はいわゆる「永明体」を継承発展させたもので、永明体とは南朝齊（四七九―五〇二）の永明年間（四八三―四九三）に、沈約らが中心となつて生み出した文体である。沈約（四四一―五一三）は寒門の出身ながら学問文章にすぐれ、当時から梁の武帝と親しい関係にあつたため、梁の初めには高位高官を歴任した。かれはまた中国の言葉に平・上・去・入の四声があることを積極的に提唱し『四声譜』を著したことで知られている¹³⁾。もちろんこのことは詩や賦の韻律論にとつても画期的な事件であつた。永明体はこの四声を交替させることで声調のバランスをとり、文の韻律をより美しく高めようとするものであつた。

もつとも、沈約による四声の発見や永明体の試みはただちに一般的な認知を得たわけではない。例えば、梁の武帝はいくら説明を受けても四声が理解できなかったとされている¹⁴⁾。また永明体の試み自体にも問題があつた。永明体は四声を交替させることで声調のバランスをとろうとするものであつたが、平声の文字は他の三声の文字よりもはるかに多く、四声を相互に交替させるとなるとアンバランスが生じる。そこで韻律をより均整のとれたものにするため、平声と他の三声を交替させて平仄のバランスをとつたのが宮体なのである¹⁵⁾。こうしてみると、まだ実験的な段階にあつた沈約らの試みを継承して追求していこうとしたのが晋安王の文学サロンであり、そこで生み出されたのが宮体であつたといえよう。

この晋安王の文学サロンで中心的な役割を果たしていたのは、沈約の次の世代の徐摛や庾肩吾であつた。さらに彼らが生み出した宮体をもつとも優れた文章のかたちで示したのが、彼らの子の徐陵（五〇七―五八三）と庾信なのである。こうした彼らの文学的な指向について『梁書』卷四九庾肩吾伝には次のようにある。

そもそも簡文帝は晋安王であつたとき、つねに文章の士を好み、当時

庾肩吾や東海の徐摛、呉郡の陸杲、彭城の劉遵、劉孝儀、孝儀の弟の孝威らが近くに侍った。皇太子になるや文帝省を開設して学士を置き、庾肩吾の子の信、徐摛の子の陵、呉郡の張長公、北地の傅弘、東海の鮑至らを選んで当てる。齊の永明中、文士の王融、謝朓、沈約の文章は初めて四声をもち「新変」とされたが、ここにいたって彼らは特に声韻にこだわり、ますます華麗さを貴ぶこと往時をこえるようになった（始用四聲、以爲新變、至是轉拘聲韻、彌尚麗靡、復踰於往時）。

このようにして彼らは沈約らが永明体で提起した問題をより先鋭的に追求していくことで後の近体詩の先蹤となる平仄法を発見していく。しかしその一方で、こうした彼らのこだわりは、しだいに彼らの文学をして、従来の正統的な文学から逸脱させていくことになるのである。しかしなおこの段階では、所詮は一王府における遊興のレベルにすぎなかったといえる。

彼らに大きな転機がおとずれるのは梁の中大通三年（五三一）のことである。すなわちこの年、皇太子であった昭明太子が突然亡くなり、それに変わって晋安王が皇太子とされたのである。皇太孫という選択肢もあったことを考えると、この事態は晋安王も予期せぬことであつたに違いない。しかし、このことで彼らの文学は東宮の文学としてにわかに脚光を浴びることになる。そして宮体のごときは武帝の耳に入り、武帝を怒らせることになった。『梁書』卷三〇徐摛伝には次のようにある。

徐摛の文体はすでに独特のもので、東宮に仕えるものはみなそれを学んだので、そこから「宮体」と呼ばれるようになった。武帝はそれを見て怒り、徐摛を召し出して詰問しようとしたが、会ってみると対は明敏で、辞義はりつばなものであつた。そこで五經の大義を問ひ、ついで歴代の史書および諸家の雑説を問ひ、最後は仏教を論じた。徐摛の論説は行き渡っており、応答は響くが如くであつた。武帝は大変感心し、それからお側に置かれ、寵遇日々盛んとなった。

あるいは武帝と庾肩吾との間には次のようなエピソードがある。『陳書』卷三二殷不害伝によれば、殷不害は能吏で東宮通事舎人を務めていた。ある時期から武帝は政治を東宮に委ねるようになっていたので、殷不害は庾肩吾と交替で当番し、武帝への報告をおこなった。ある時、庾肩吾が報告に上がると武帝は、「そなたは文学の士であり政務は得意でないはずだ。

どうして殷不害をよこさないのか」といった。

徐摛も庾肩吾も当時一流の門閥貴族とはいえず、いわゆる寒門層の出身であつた。文学に秀でていたが、それは貴族的な教養というよりは、ひとつの技能のようなものとしてみられていたようである。したがって晋安王綱のサロンにおける「新変」へのこだわりも当時の宮廷社会全体からみれば、特殊な技術論へのこだわりにしかみえなかった可能性がある。

すでに述べたように、武帝は四声を理解しなかったのであるから、徐摛らの文学が理解できなかったのは無理もない。しかしここで興味深いのは、武帝が徐摛をよびだし、儒教経典から史書、諸子百家、仏教にいたる当時の正統学問の理解について質していることである。つまり、武帝が直接よびだして面前で確かめなければわからないほど、彼らの文学には「内容」がなかったということである。

そもそも四六駢麗体とよばれるこの時代の文体は、四字句と六字句を基本とし、それに対偶（対句）、韻律、典故、鍊字などの修辭をほどこしたもので、六朝貴族文化の長い伝統のなかで培われたものである¹⁶。武帝自身も齊の時代、謝朓、任昉、沈約、陸倕、范雲、蕭琛、王融とともに竟陵八友と称された文章家であり、修辭の追求そのものは何ら批判されるべきものではない。

このことは庾信を「詞賦の罪人」と断罪した初唐の文学思想においても同様で、例えば、唐の貞観十年（六三六）に完成した『周書』の卷四一庾信伝には、

庾信の文章は宋の末に源を發し、梁の末期に盛んにおこなわれた。その文体はもともと淫放で、詞は軽さやきわどさを好んだ（其體以淫放爲本、其詞以輕險以宗）。それゆえにいつも女性に目を向け、淫らな表現にこころを費やしたのだ（故能誇目於侈於紅紫、蕩心逾於鄭衛）。むかし楊雄は「詩人の賦はその華麗さを則で表すが、詞人の賦はそれを淫で表す」（詠人之賦、麗以則、詞人之賦、麗以淫）といった。もし庾氏をこれに当てはめるならまったく「詞賦の罪人」というべである。

と述べており、庾信を徹底的に批判しながら、一方では漢の揚雄の言葉を引きながら秩序だった華麗さを認めている。むしろ理想の文章としては「和

にしてよく壯であり、麗にしてよく典であり、輝くこと五色の文章を生み出すよう、精緻なことあたかも八音が群れ集うよう（和而能壯、麗而能典、煥乎若五色之成章、紛乎猶八音之繁會）と述べており、「麗」と「典」「則」の両立こそが望ましいとされたのであった⁽¹⁵⁾。したがって、この場合にも庾信に対する非難は、もっぱらその内容に向けられたものと考えてよいだろう。

晋安王の文学サロンで詩の応酬がおこなわれる際、彼らが特に好んだのが女性の容姿や心情を詠うことであった。例えば、森野繁夫氏は徐庾体の特徴を「形式の面では、典故を敷きつめて鋪陳の巧みさを誇るようなことをせず、軽快な表現、滑らかな言いまわしによって、作者の情性を直接的に表現する。また内容の面では多く、女性の空闊の情や姿態、女性の服装、女性の用いる器具など、素材を女性の世界に求めたものであった」と述べている⁽¹⁶⁾。『周書』の史官が庾信の文学を「淫」とするのも、直接的にはこのような理由によるものである。

彼らが女性を題材としたのは、彼らの美意識が自然に女性の美しさに向かわせたとも考えられるが、果たしてそれほど単純に考えてよいだろうか。興膳宏氏によれば、『玉台新詠』は梁の中大通六年（五三四）ごろ晋安王のもとで完成した。すなわち晋安王綱が皇太子になって数年後のことである。「艶詩のアンソロジー」である『玉台新詠』は、従来のアンソロジーと異なって当時存命中の人物の詩を多く収録している。そこにはオーソドックスな昭明太子の『文選』に対抗して彼らの文学を宣揚するねらいがあったという⁽¹⁷⁾。

この興膳氏の説を敷衍するならば、彼らが女性を題材としたのもやはり文学の模範集とでもいうべき『文選』に対抗するため、あえて「内容」をなくすことで新しい韻律論を武器とした修辭の美しさを強調しようとしたとも考えられる。もともと、それは皇太子になってからのことで、もともとは皇太子の同母弟として、文学においても王道をあゆむ兄昭明太子への遠慮あるいは配慮から、あえてマニアックな文学の道を選択したとも考えられる。また皇太子の座についてからは『玉台新詠』の編纂にせよ、文徳省の開設にせよ、自らの独自性を打ち出

そうとする姿勢ははっきりしているが、そうであるにしても、彼らに既存の文学を否定しようなどという意図はなかったであろう。また武帝にしても、それに違和感を感じながらも、徐摛が実は豊かな教養の持ち主であることを知ると宮体に対する怒りは解けたようである。『玉台新詠』に武帝の詩が入っていることからしても、なお両者が対立を意識するようなことはなかったといえる。

文章が美しくあるべきは当時の常識であり、宮体はそのための実験的な試みであった。晋安王の文学サロンでは特にそれが追求されていたとはいえず、晋安王が『五経講疏』についてすぐれた講義をおこなっているように、また徐摛が経学から史書、諸子百家、仏教にいたる当時の正統学問をすべて理解していたように、彼らの学問は多岐にわたっており、宮体の文学活動はあくまでその一環にすぎなかった。しかし、その部分だけを切り取ってみれば、内容の面において正統な文学からの逸脱が起り始めていたのである。

2 北周における庾信体の盛行

庾信が梁の東宮で華やかな宮廷生活を送っていたころ、中国の北半分では鮮卑族の拓跋氏の北魏が分裂し、東魏と西魏という二つの魏が互いに覇を争い戦争を繰り返していた。当時は南北朝の時代といっても国力はいえ北魏は梁をはるかにしのぐ大国であったから、その分裂は梁の朝廷に樂觀的なムードを生み出し、宮廷生活をいっそう華やいだものにした。徐陵や庾信の文章を読み詠うことは都建康での流行となった。庾信が東魏に使者として使わされた際には、東魏の都の鄴でも評判を取った。庾信は官界においても順調に出世し、ついに東宮学士のまま建康令に昇った。

しかし、五四七年に武帝が東魏の降將の侯景を迎え入れたことで、梁の運命に暗転が始まる。武帝は初め侯景を利用して領土を拡大する意図であったが、東魏の軍勢力が依然として強いことを知ると、武帝は密かに東魏との和平交渉を始めた。これを察知した侯景は自らの窮地を救うため、梁に対する反乱を起こす。その軍隊はまたたくまに建康を包囲し、建康令として朱雀航を守っていた庾信は防衛に失敗、江陵に拠点をおいていた武帝

の第七子の湘東王繹のもとに逃走する。武帝は建康陥落のち侯景の監視下で哀れな最期を遂げ、晋安王は侯景の傀儡として皇帝に立てられたのち殺された。

五五二年に湘東王繹は江陵で即位し梁の復興を目指す。これが梁の元帝であるが、元帝は五五四年に領土交渉のため庾信を西魏に使わす。ところが、その間に西魏は江陵に侵攻し、江陵は陥落、元帝は自殺してしまう。亡国の臣となった庾信は、江陵から連行されてきた梁の旧臣とともに、そのまま西魏に抑留される。

当時の西魏では漢化に抗い鮮卑的な姓の復活を図るなど、いくつかの復古的な政策がおこなわれていた。文学の面では漢魏以来の貴族的な文学を全否定し、遙か周の時代の文章に返ろうとする運動が展開されていた。この運動がおこなわれた背景には西魏の支配者層が武川鎮軍閥とよばれる北族的な風風を強く残した武人集団であったことがある²⁰⁾。

その中心人物は宇文泰であったが、五五六年に宇文泰が死ぬと、翌年宇文泰の第三子の宇文覺が即位して北周を建国する。ただし宇文覺は実力者の宇文護と対立して廃位され、ついで宇文泰の長子の宇文毓が即位して北周の明帝（在位五五七—五六〇）となる。

この明帝も在位三年で宇文護によって廃位されるが、この間に明帝はあらたに麟趾殿を開設し、庾信ら旧梁臣を学士として集め文学サロンを開く。庾信の北周での活躍はこのときから始まる。その様子について『周書』巻四一庾信伝は次のようにある。

明帝と武帝はともに文学を愛好し、庾信は特に恩礼を加えられた。趙王や滕王らの諸王はいたれりつくせりのもてなしぶり、身分や地位を気にしないかのような交際をし、多くの諸公が墓碑や墓誌の文章を依頼した。ただ王褒のみがこれに並ぶあつかいで、その他の文人でこれにおよぶものはいなかった。

王褒もまた梁の旧臣であるが、名族琅邪の王氏の出身である。明帝や武帝、趙王、滕王はともに宇文泰の子であり、いわば武川鎮軍閥の第二代である。文学復古運動を展開した第一世代とはうって変わり、今度はこれら第二世代の熱烈な支持によって、北周の文学は庾信一色ともいえる状況が展開していくのである。

問題はなぜこのような転換がおこったのかであるが、この点は西魏北周の政治史ともかわり膨大な考察を要するので、本論ではひとまず西魏北周と対立した東魏北齊の文学の動向との比較からこの問題に対する手がかりをつかんでおくことにしたい。

西魏が宇文氏に取って代わられ北周になる前、東魏（五三四—五五〇）でもやはり実力者の高氏が帝位を奪い北齊（五五〇—五七七）を建国していた。ただし、この東魏北齊では西魏のような漢魏以来の文学を否定するような動きはなく、むしろその伝統を守りつつ独自の文学が展開された。これを担っていたのはおもに現在の河北や山東に基盤をもつ漢族の門閥貴族たちで、自らが漢魏文化の継承者であることに強い誇りをもつものたちであった。もちろん彼らとても南朝文学に強い憧れを抱いており、庾信が東魏の都の鄴を訪れた際、当地で評判を取ったのはそのことを示す。ただし、もっぱらかれらが学ぶべき対象と考えたのは、庾信らの文学ではなくて、その二世代前の沈約や任昉らの文学であった。顔之推は『顔氏家訓』第九文章編で次のように述べている。

邢邵と魏収はともに高名で、世間では二人をお手本とし、また師匠と仰いだ。邢邵は沈約を尊敬し任昉を軽んじ、魏収は任昉を敬愛し沈約を譏り、歌宴のごとにそれぞれの色合いの文章をつくった。これに応じて都の鄴では論争がおこり党派にわかれた。祖珽はかつてわたしに言った、「沈約・任昉の是非はすなわち邢邵・魏収の優劣です」と。では彼らの徐庾に対する態度はどうであったのだろうか。このことについては『太平御覽』巻五八五に引く『三國典略』に次の記事がある。

あるとき北齊の君主は魏収に問うた。「そなたの才能は徐陵と比べてどうか。」魏収は答えていった。「臣は大国の才であり、典にして雅を用います。徐陵は亡国の才であり、麗にして艶を用います（臣大国之才、典以雅。徐陵亡國之才、麗以艶）。」

実は徐陵も庾信とほぼ同じようにして東魏北齊に留まっていた。徐陵は五四八年五月、すなわち侯景の乱の直前に東魏に派遣され、八月に侯景の乱が起きたため帰国できなくなっていた。しかし、北齊の天保六年（五五五）三月、北齊の文宣帝が混乱のつづく江南に傀儡政権を立てようとしたとき、徐陵も一緒に送り返される。庾信が北周の文学を席巻したのと比べ

て、北齊文学が徐陵一色に染まるということはなかった。

その一方で、梁から北齊に渡って活躍した人物もいる。先ほど引用した『顔氏家訓』の撰者顔之推（五三〇—五九一）である。顔之推は文士が集う北齊の文林館に招かれ、詔勅起草の中書舍人となった。顔之推は梁では湘東王繹の文学サロンに属していたが、『北齊書』巻四五顔之推伝によれば、「虚談は好まず、『礼記』と『左伝』の学習に打ち込み、群書を博覧し、該博な知識を備え、詞情は典麗で、湘東王府での評判は非常に高かった（虚談非其所好、還習禮傳、博覽群書、無不該洽、詞情典麗、甚為西府所稱）」とあり、元来オーソドックスな文学観の持ち主であったといえる。

このような顔之推が徐庾の文学に対して批判的なまなざしをもっていたであろうことは容易に想像される。実はそのことは『顔氏家訓』においてもはつきりと述べられている。やはり第九章編に次のようにある。

文章は理致をもつて心腎とし、氣調をもつて筋骨とし、事義をもつて皮膚とし、華麗をもつて冠冕とすべきである。今や世の中は本末転倒し浮ついたものが多い。辞と理が競えば辞が勝り理が伏し、事と才が争えば事が茂つて才が損なわれる。放逸なものは流されて帰るのを忘れ、穿鑿するものはあれこれ綴つてなお足らない。時俗がこのようならどうして一人違ふことができようか。（中略）我が家の文章は代々甚だ典正で、流俗に従わなかった（吾家世文章、甚爲典正、不從流俗）。梁の元帝さまがまだ藩邸に居られた頃、『西府新文』が作られたが、ついに我が家からは一篇の文章も採録されなかった（梁孝元在藩邸時、撰西府新文、訖無一篇見録者、亦未得編次）。世間に迎合せず、亡国の響きがなかったからである。

元帝が湘東王の時代に編纂した『西府新文』が「新変」の文体のアンソロジーであることはまず間違いないであろう。顔之推はこのようなアンソロジーを苦々しく思いつつ、顔氏の文章が一編も採録されなかったことを誇りとし、我が家の文章を「典正」と呼んでいる。もうひとつ、同じく『顔氏家訓』第九章編から顔之推が宮体の文章に批判的であった証拠を示そう。

古より博学宏才でありながら、故事を引用しそこね誤りを犯すものが

ある。諸家で見解は異なり、もしその書が滅んでしまえば、後の人はそれを見て検証できないので、軽々しくは非難することはできないが、いま明らかな誤りであるというものを一、二挙げ、戒めとしておく。

（中略）文章中の地理はきちんとしておくべきである。梁の簡文帝さまの『雁門太守行』には、「鷲軍は日逐を攻め、燕騎は康居を蕩い、大宛は善馬を帰し、小月は降書を送る」（鷲軍攻日逐、燕騎蕩康居大宛歸善馬、小月送降書）とあり、蕭子暉の『隴頭水』には、「天寒うして隴水急なり、散漫して俱に分瀉れ、北に注ぎては黄龍に徂ぎ、東に流がれては白馬に会す」（天寒隴水急、散漫俱分瀉、北注徂黄龍、東流會白馬）とあるが、まことに明珠美玉の瑕疵といふべきである。

子孫よこれを慎め。

雁門郡はいまの山西省西北部、「日逐」は匈奴の官爵名、「燕」は河北省北部。ここまではよいが、「康居」はキルギス、「大宛」はフェルガナでウズベク地方にあり、「小月」は月氏族の一部で甘肃省の西境にあった。もはや雁門郡とは何の関係ももたない地域である。また「隴頭水」はもと漢の横吹曲の名であり、「隴頭」は陝西・甘肅省境の隴山のふもとを指す。「白馬」を河南省滑県付近の白馬津とすれば黄河の水系でつながるが、「黄龍」は遼寧省ではるか東にあり、隴水が黄龍を流れることはありえない⁽²⁰⁾。一種の誇張表現とはいへ、あまりに脈絡がないのは事実である。

簡文帝はすなわち晋安王であり、蕭子暉については正史に詳しくないものの、兄の蕭子恪、子質、子暉、子雲とともに文学に優れていたとされる⁽²¹⁾。とくに蕭子暉は晋安王と親しく何編かの詩が『玉台新詠』に収録されている。また上記のふたつの詩は、ともに平仄を交替させているところをみると、いずれも「宮体」の詩ではなかったかと思われる。もしそうであるとすれば、こうしたことも「宮体」が「典正」でないといわれる理由のひとつと考えられよう。

以上、東魏北齊の状況をみてみると、貴族的であることは必ずしも徐庾体の受容に結びつかないということがわかる。あるいは、「典正」でない徐庾体は、本当の意味では貴族的でないともいえるだろう。

そのことからいえば、西魏における漢魏文学の否定と北周における庾信

体の流行は、一見、百八十度の転換にみえて、実は通底するものがあるのではないかと思われる。庾信を受け入れた武川鎮軍閥の第二世代たちは、庾信体の高度な技巧性に憧憬するほど漢文化に順化していたとはいえず、まだ觀念としては十分に貴族化しておらず、庾信の文学を「淫放」とか「輕險」とかいつて否定することはなかったのである。また同時に、西魏において漢魏文学が徹底的に否定されていたからこそ、庾信の文学は「典正」なる觀念に邪魔されず浸透することができたとも考えられよう。

ただし、このことは必ずしも庾信自身にとつての幸福とはいえなかった。すでに述べたように、文学は庾信らの人格の一面を表すものにすぎなかった。ところが、北周においては庾信は文学の士としてのみ受け入れられたのであって、高位高官にあるとはいえず、政治の中核にかかわる存在ではなかった。庾信は文学の士として高く評価されればざるほど疎外を感じることになったろう。「枯樹賦」や「竹杖賦」にみられる憂悶の情は、北周期の庾信文学の重要なテーマであるが、そこにはこうしたかれの疎外感があるのではないかと思われる。

3 初唐における庾信批判

庾信が亡くなったのは北周から隋への禪讓がおこなわれた開皇元年（五八一）のことである。北周から隋への禪讓がおこなわれたのは二月で、庾信はまだこの年の七月には依頼された墓碑の文章を完成させているから⁽²⁸⁾、庾信はこの禪讓をみたであろう。すでに六九歳になっていた彼は隋には仕えなかったようである。

隋は文帝、煬帝の二代で滅び唐が建国される。しかし隋の楊氏も唐の李氏もともに北周の宇文氏と同じ武川鎮の出身で血縁で結ばれており、これらの王朝交替は武川鎮軍閥内部での政權交代にすぎなかった。

文学の面からいえば、武川鎮軍閥が徐々に貴族化しはじめるのは、その第三世代にあたる煬帝のころからであろう。『隋書』卷七六文学伝序に煬帝の文学について次のように述べている。

隋の文帝は始め天下を治めるのに、いつも文章は質朴であるべきと考へ、号令を發して浮華をとりさうとした。しかし当時の世俗の修辭はなお淫麗で、よつて御史台はしばしば法による取り締まりをおこな

わねばならなかった。煬帝の文章も初めは軽々しいところもあったが、即位に及んで文章の風格は一変した。「与越公書」「建東都詔」「冬至受朝詩」「擬飲馬長城窟」などは、いずれも雅体を残しながら典制に帰している（並存雅體、歸於典制）。心にはなお驕淫なところがあつたが、詞には浮ついたものがなかった。ゆえに当時の文章を綴るものは煬帝の文章を抛り所として正邪の基準を得たのである。

また『隋書』卷五八柳詒伝には次のようにある。

柳詒の字は顧言、もと河東の人である。（中略）晋王（後の煬帝）は文雅を好み、才学の士の諸葛穎、虞世南、王胄、朱瑒ら百余人を学士にあて、柳詒を一番上においた。晋王は彼を師友として処遇し、いつも文章を作るたびに、彼に潤色を加えさせ、それから人に見せた。都に上つてから任地へ帰り「帰藩賦」を作ったときは、柳詒に命じて序文を作らせた。その詞ははなはだ典麗であつた（詞甚典麗）。はじめ、晋王は文章を作るのに庾信体を用いていたが、柳詒に出会つてその文は一変した（初、王屬文、爲庾信體、及見詒已後、文體遂變）。

煬帝も初めは庾信体を習っていたのであるが、後にそれを捨て「典麗」といわれる文体に転じていった。このころになると、庾信体は王者に似つかわしくない軽薄な文章ととらえられるようになっていたのである。

ただ、武川鎮軍閥の第四世代にあたる唐の太宗の時代にもまだ庾信体は流行しており、太宗自身も庾信体の詩を学んでいた⁽²⁹⁾。しかし、庾信を「詞賦の罪人」と断じた『周書』が太宗の貞觀十年（六三六）に完成していることからすれば、このころすでに庾信の文学を不道徳とする見方は公のものになつていたといえる。この趨勢が広く浸透してくるのは盛唐から中唐にかけてのことらしい⁽³⁰⁾。最後にこの風潮を如実に示す二つのエピソードを挙げておこう。ひとつは『旧唐書』卷一九〇（中）文苑伝の記事である。

富嘉謨は雍州武功の人である。進士に挙げられ、長安中（七〇一—七〇四）には晋陽尉にまで昇進し、新安の吳少微と仲良くなり同僚となつた。それまで文士が碑や頌を書くときはみな徐陵や庾信に倣つて書いたもので、次第に文章に格調がなくなつてきていた（先是、文士撰碑頌、皆以徐庾爲宗、氣調漸劣）。富嘉謨と吳少微は文章を作る際に、

いつも經典をもとにしていたので、時の人はこれを喜び慕い、ここに文体は一変し、富呉体と称されるようになった（嘉謨與少微屬詞、皆以經典爲本、時人欽慕之、文體一變、稱爲富呉體）。富嘉謨が書いた「双龍泉頌」や「千蠟谷頌」、呉少微が書いた「崇福寺鐘銘」は詞も高雅で、作者も重きを置くものであった。

この記事から東野治之氏は唐で庾信体の碑銘が流行していたことを示され、墓誌銘でも庾信体の流行があったことを類推されている²⁶。碑頌と墓誌銘では性格が異なるので、墓誌銘においても庾信体の流行があったかどうか、さらにまたそれが威奈大村墓誌とどう結びつくかは別に検証が必要であるが、今日残された庾信の文章のなかにかなり多くの墓誌銘や神道碑が含まれ²⁷、恐らくそれは六朝文人のなかでも傑出した量であろうことを考えれば²⁸、庾信の墓誌銘や神道碑が唐代に相当広く参照されたことはまず間違いないものと思われる。その点はともかく、徐庾体に対して富呉体が「經典」にもとづくという特徴をもつのであれば、これに対する庾信体は經典輕視の文体とみられていたということができようであろう。

このことを裏付けるのが、唐・道世撰『法苑珠林』巻二六に引かれる次のような仏教説話である。すなわち、唐の遂州の人、趙文信は貞觀元年（六二七）暴死し、三日後また蘇るが、その臨死体験として次のようなことを語る。初め死んだ時、人から追い立てられ、十人ほどで閻魔王のもとに連行されるが、その中に一人の僧侶がおり、まず閻魔王が彼に在世中の功德を問う。僧侶が「生まれてこのかた金剛般若經のみを読誦してまいりました」と答えると、閻魔王はたちまち立ち上がって合掌し、僧侶が地獄に落ちたのは間違いであったとして彼を天上に昇らせる。次に趙文信を尋問するが、彼は「わたくしは生涯仏典を読まず、ただ庾信の文集だけを好んでまいりました（臣一生以來、不讀佛經、唯好庾信文章集）」と答える。すると、閻魔王は「庾信は大罪人である」といって龜の姿に変えられて地獄の責め苦を受けている庾信を引き出す。次に人の姿にもどって現れた庾信は趙文信に次のように語る。「わたしは存命中好んで文章をつくり、妄りに仏典を引いては俗書と混ぜ合わせ、また仏教を誹謗して孔子老子の教えにおよばないと言っていました（我爲生時好作文章、妄引佛經、雜揉俗書、又誹謗佛法、謂言不及孔老之教）。いま罪をえて龜身にされていま

す。」

この話が唐のいつごろ作られたものかは定かではないが、三つの点で非常に示唆に富む。

一つは時間の設定を唐の太宗の時代に行っていることである。二つめはここに現れる趙文信が生涯仏典を読まずひたすら文学に感嘆した人物で、彼が好んだのが庾信の文集とされているという点である。ここで想定されている彼の文学は決して貴族的な文学ではない。むしろ狭い意味での造句に執着した文学なのであって、一種の文芸ともいべきものであったと想像できよう。庾信集はそのバイブルのようなものとして登場する。

三つめには具体的に庾信の文学が否定される理由である。これについて上記の説話の庾信の告白では、文章を作るのに妄りに仏典を引いて俗書と混ぜ合わせたこと、仏教を誹謗したことの二つがあげられている。このうち後者については具体的に庾信が仏教を誹謗した事実は見あたらないが、あるいは北周武帝の廢仏において何かそれに類する文章を書いたかも知れない。しかしそうであったとしても、そのような文章が殊更仏教にとつて脅威となるはずはなからう。むしろ二つめに述べたこととかかわって問題となるのは前者である。これは庾信体が変わって流行した富呉体が「經典」にもとづく文体であったということも符号する。したがって、妄りに仏典を引くというのは、本来仏教と関係のない文章の中に、単なる裝飾の言葉として、極めて無頓着に仏典を典故に用いるようなことをいうのである。

上記の説話は、それ自体は、文学に感嘆することを戒めたものであるが、そこには政治や宗教を離れ、ある意味では純粹に、文章の美しさを追求する文学が生まれていたことを示している。しかし、そのことは文学の本質を逸脱するものとして、政治の側からも宗教の側からも厳しい批判の対象とされた。その際に、カリスマとなっていた庾信が、個人の实像とは離れて、文学に感嘆した人物として「罪人」扱いはされるようになるのである。

果たしてそれが庾信の文章そのものの性格によるものか、あるいは庾信体の影響と見られるものの中にそのような傾向が生まれたのかについては今のところ筆者にはわからない。しかしいずれにしても、庾信体流行の背

景にその貴族趣味的な装飾性だけでなく、技術的な新鮮さと内容に束縛されないある種の自由さがあつたことを考えるべきであろう。そしてそれは、比較的伝統的な觀念から自由でありえた、この時代の政治的な状況が可能にしたものではないかと考えられるのである。

注

- (1) 東京大学史料編纂所『大日本古文书』編年之三、東京大学出版会、一九〇二年、八九頁
 - (2) 『隋書』経籍志「周開府儀同庾信集 二十一卷 并録」、『旧唐書』経籍志「庾信集二十卷」、『新唐書』芸文志「庾信集 二十卷」
 - (3) 『日本古代の墓誌』奈良国立文化財研究所・飛鳥資料館、一九七七年
 - (4) 山田孝雄「威奈真人大村墓誌銘の文の考証」『奈良文化』二三、一九三二年
 - (5) 柿村重松『上代日本漢文学史』日本書院、一九四七年、二二二頁
 - (6) 小島憲之『上代日本文学与中国文学』上、塙書房、一九六二年、一〇六一—一〇九頁
 - (7) 威奈大村墓誌銘の題名には「少納言正五位下威奈卿墓誌銘并序」とあるが、題名の下に小字で「并序」で添えるのは唐代の墓誌によくみられる書式である。庾信の墓誌銘の実物としては、北京図書館金石組編『北京図書館蔵中国歴代石刻拓本匯編』第八冊（鄭州、中州古籍出版社、一九八九年）の「歩六狐須密多墓誌」があるがこの書式を用いていない。また近年発見の「田弘墓誌」（原州聯合考古隊編『北周田弘墓』勉誠出版、二〇〇〇年）も庾信撰の可能性が高いがやはりこの書式を用いていない。したがって威奈大村墓誌の書式は庾信墓誌ではなく唐代の墓誌を参照したものであろう。
 - (8) 内田賢徳「孝徳紀挽歌二首の構成と発想」『萬葉』一三八、一九九一年
 - (9) 興膳宏『庾信』集英社、一九八三年
 - (10) 樋口泰裕「資料」庾信研究文獻目録初稿（『筑波中国文化論叢』二二、二〇〇一年）には日文、中文合わせて二三編の著書・論文が掲載されている。
- この他、英文の研究に、William T. Graham, Jr. 'The Lament for the South', Cambridge: Cambridge University Press, 1980 がある。また二〇〇〇年以降出版された庾信に関する専著に、矢嶋美都子『庾信研究』（明治書院、二〇〇〇年）、加藤国安『越境する庾信 その軌跡と詩的表象』上下（研文出版社、二

〇〇四年）、林怡『庾信研究』（北京、人民文学出版社、二〇〇〇年）、徐宝余『庾信研究』（上海、学林出版社、二〇〇三年）、葉慕蘭『庾信年譜新編及其詩歌析論』（台北、洪葉文化事業、二〇〇四年）がある。

(11) 陳寅恪「庾信哀江南賦与杜甫詠懷古跡詩」、『陳寅恪集 金明館叢稿二編』北京、生活・讀書・新知三聯書店、二〇〇一年）、岡崎文夫「南北朝末期より唐初に至る文学史の一面」、『歴史と地理』三四—四・五、一九三四年）

(12) 注10、加藤氏前掲書

(13) 『梁書』卷三〇沈約伝。この時代、四声が自覚されるようになるには、仏教をつうじてサンスクリットの梵唄が伝わった影響があると考えられる。頼惟勤『中国古典を読むために』大修館書店、一九九六、一九一頁

(14) 『梁書』卷三〇沈約伝

(15) 興膳氏前掲書、三三三頁

(16) 福井佳夫『六朝美文学序説』汲古書院、一九九八年

(17) 古川末喜『初唐の文学思想と韻律論』知泉書館、二〇〇三年、一四四頁

(18) 森野繁夫『六朝詩の研究』第一学習社、一九七六年、一三二頁

(19) 興膳宏「玉台新詠成立考」『東方学』六三、一九八二年

(20) 谷川道雄『増補 隋唐帝国形成史論』筑摩書房、一九九八年

(21) 以上の解釈については、『世説新語・顔氏家訓』（平凡社、一九六九年）五一〇頁の宇都宮清吉氏の解説を参考としたが、「白馬」については、王利器『顔

氏家訓集解』（上海、上海古籍出版社、一九八〇年）二七一頁の説にしたがう。

(22) 『梁書』卷三五蕭子恪伝

(23) 倪璠『庾子山集注』北京、中華書局、一九八〇年、三六頁

(24) 『全唐詩』卷一・太宗「秋月數庾信体」詩

(25) 土屋昌明「費振剛著『銘文と碑文』訳稿—附・庾信の碑銘について—」『富士フェニックス論叢』一、一九九三年

(26) 東野治之「威奈大村墓誌と庾信集」『萬葉』一一六、一九八三

(27) 庾信の碑銘文の性格については、原田直枝「庾信の碑銘文」、『中国文学報』五三、一九九六年）が詳しい。

(28) 国では墓誌は文学の一つのジャンルといえる。しかし『文選』には墓誌銘はわずかに任昉の「劉先生夫人墓誌」の一編しか収められていない。庾信は墓誌を文学の対象に引き上げるうえでも一定の影響をもったのではないかと思わ

れる。中国における墓誌の文学性については、吉川幸次郎・小川環樹『中国の散文』（筑摩書房、一九八四年）参照。